

## 「コリント教会へのパウロの手紙」のポイント

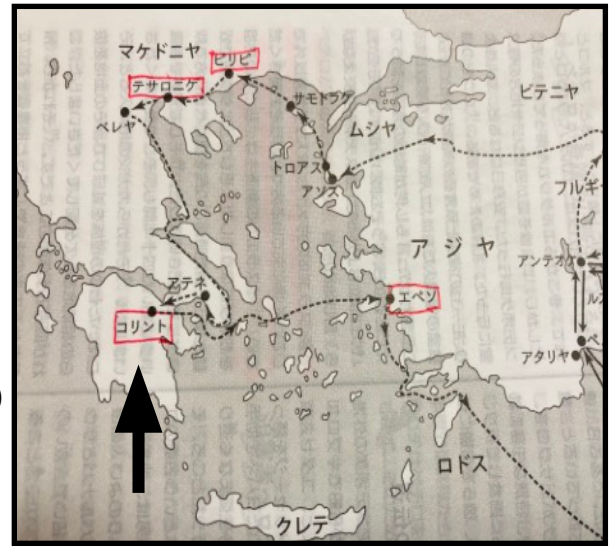
## 1 コリント教会への手紙のアウトライン

## A：教会の問題についての対処

- (1)教会の分裂について(1章10節～4章21節)
- (2)教会の無秩序な状態について(5章1節～6章20節)

## B：教会の質問に答える

- (1)クリスチャンの結婚に関する教え(7章1節～40節)
- (2)クリスチャンの自由に関する教え(8章1節～10章33節)
- (3)礼拝に関する教え(11章1節～14章40節)
- (4)復活に関する教え(15章1節～16章24節)



## 「コリント教会へのパウロの手紙」を読んでみよう

## 1 今日の聖書箇所：14章13節～33節

## 2 今日のポイント：霊性と知性で

## (1)前回までの復習

コリント教会にはさまざまな賜物を持った人々がいました。賜物は英語でGiftと翻訳され、創造主から与えられる能力や力などを指します。コリント教会は、この賜物を教会の為にではなく、自分の為の名誉の為に用いました。パウロはそのような霊的賜物が生かされるものとして「愛」の賜物を求めるように語りました。その後、14章では、異言と預言の賜物について語ります。当時のコリント教会では、異言と預言の賜物の問題で教会に大きな葛藤が生じていたからです。異言は個人の祈りの時に用いる事が良い事だと語り、預言は教会全体を建て上げる為に役に立つと語っています。これはどちらの賜物が優秀かという優劣をつけるものではありません。賜物のゆえに分裂しかけていたコリント教会に対してパウロは、教会の一致の為に賜物を求めるようにと語りました。

## (2)霊性と知性で(13節～16節)

パウロは13節からも、続けて「異言」や「預言」の賜物について語っています。パウロは、このコリント教会への手紙を「教会を立てあげる為の賜物」という視点で書いています。異言という賜物は重要だけれども、教会を立てあげる為にはその意味を分かるようにする事が大切だと13節で語っています。コリント教会では「異言」や「預言」の賜物が、公式の礼拝の中で用いられており、いくつかの葛藤を生む原因となっていました。そのような観点からパウロは15節で願わしい礼拝の姿について語りました。「霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊においても賛美し、また知性においても賛美しましょう(新改訳)」異言の祈りは私たちの言葉にできない思いを霊的な言葉で祈ることができる為個人的な祈りの時には有益ですが、教会全体を考える時には、霊的(ここでは異言の)祈りも大切ですが、知性での祈り、つまり、人々が聞いて理解できる言葉で祈ることの有益が大きいのも事実です。また賛美もただの歌や演奏ではなく創造主への賛美です。創造主の素晴らしさを語ろうとする時、創造主を

ほめたたえようとする時、言葉にできない感謝や思いが溢れてくる時もあるでしょう。そのような思いを霊的な言葉で賛美する事も重要でありながら、人々が聞き、理解できる言葉で賛美する事も重要です。パウロは、教会の礼拝が霊的でもあり、知性的でもある事を通して、教会に集う多くの人の信仰を立てあげる事になれば…と願っていました。

### (3)物事の判断について(17～節)

パウロは続いて「ものの考え方においては、何も分からない子供のように困る」「ものの考え方においては、立派な大人であって欲しい」と20節で語りました。これは、未信者が共に集う礼拝を念頭においてパウロが語った言葉です。当時のコリント教会では、霊的賜物が無秩序に用いられた礼拝であった為、礼拝も若干の混乱の中、捧げられていました。礼拝は霊的でありつつも、知的に捧げられる時、未信者に福音を伝え、悔い改めへと導く事ができます。コリント教会では霊的でありつつも、賜物(異言)が無秩序に用いられていた為、未信者にとっては、教会の礼拝は、遺言などを理解ができない自分が入ってはいけない共同体だと思わせられ、未信者を罪に定める(自分は救われる対象ではないと思わせる)事になってしまう(22節)とパウロは語りました。

26節からは礼拝の中で、どのようにして賜物を用いれば良いかをまとめました。異言や預言の賜物を用いることは大切ですが「全ては皆の為になるようにしなさい(26節)」と語りました。また、33節では「創造主は、無秩序のお方ではなく、平和と秩序のお方である」と語り、賜物を秩序の中で用いるように語りました。

現代の教会に集う、さまざまな人々に創造主はそれぞれ賜物を与えられています。それを皆の為になるように、また秩序の中で用いる時、教会が未信者が悔い改める救いの場として用いられます。

## 3 分かち合ってみましょう

パウロは「異言」や「預言」の賜物の大切さを語りながら、バランスよく信仰生活を送るため、また秩序の中で「霊的な」そして「知的な」礼拝を通して、未信者が悔い改めに至る礼拝(救いを頂く礼拝)になるようにとコリント教会に語りかけました。

信仰生活や礼拝にはバランスが必要です。知的な部分だけが強調されれば、セミナーのような礼拝になり、霊的な部分だけを強調すればコリント教会のような礼拝になってしまいます。賜物を無視すれば霊的な信仰生活は難しくなりますし、賜物だけに集中すれば、やはりコリント教会のように無秩序であり、賜物の優劣を気にしながら、信仰生活を送ることになります。

私たちの教会の礼拝、私の信仰生活のバランスはどうでしょうか。